

1. 問題の所在と研究の目的

平成 20 年版学習指導要領では、現行の学習指導要領から「生きる力」を引き継いだ。この「生きる力」の理念の一つに「基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」がある。

21 世紀は、新しい知識・情報・技術が社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われている（小学校学習指導要領解説）。情報が多く競争相手も増したこの状況では、いかに自ら考え行動するか、変化に対応するための能力が求められる。変化の激しいこれからの社会を生きるために誰もが身につけるべき力が「生きる力」である。

学校教育は、この「生きる力」を子どもに育んでいく必要がある。子どもが自ら学び、考え、判断したり行動したりする主体性を育むことに力を注ぐことが重要であると言えよう。

子どもが主体的に活動するためには、教師が子どもの課題解決に対する意欲や意識を高める必要がある。また、学ぶ楽しさを実感させたり、子どもが主体的に課題を見つけ、考え行動できる場を設定することが重要だろう。しかし、ただ考えさせる、活動させるだけでは主体性は高まらない。それぞれが課題意識、解決しようとする意識をもってこそ主体性は育まれていく。

学校生活の大半の時間を占めるのは授業である。授業は学級づくりのもっとも重要な活動の一つとなる。そのため、授業を中心として子どもの主体性を育んでいくことが望ましいだろう。

教育実習で配属された学級（第 6 学年）では、一人一人が課題に意欲的に取り組む姿、チャイムが鳴ったらすぐに授業が始められるように五分行動をするなど、子どもが自発的に学習しようとする姿が見られた。この学級の子どもには主体性が育っていたと考える。このように子どもが主体的に活動できたのには、教師による指導が大きく影響しているだろう。

そこで本論文では、教師が指導の中心としていて、子どもへの願いが最も表れていたと考えられる国語科の授業に焦点を当てて、指導教諭の学級づくり方法を明らかにしていきたい。一人一人が主体性を発揮するには、具体的にどのような指導が必要か考察し、実践する際の手がかりにしたい。

2. 研究対象と方法

対象：教育実習で配属された学級、第 6 学年

（男子 10 名、女子 11 名、計 21 名）

方法：12 週間の観察をした際の観察記録・授業記録を基に学級経営方法を分析する。

3. 研究の成果

指導教諭が行っていた特徴ある国語科の授業

- 自分の考えを主体的にもつ国語科の授業
「責任というもの」「もう一度考える」
- 一人一人が解説者になる国語科の授業
「やまなし」「イーハトーヴの夢」

これらの授業の中でも、特に子どもたちが様々なことを考え、読みを深めていったと考えられる授業が、「やまなし」の授業である。

この授業の分析により、子どもたちの姿として、以下の四点が表れていることがわかった。

- ①自分の考えを発言できる。

- ②疑問に答える、疑問を投げかけることができる。
- ③視点を変えて考えることができる。
- ④自分なりの言葉で表現できる。

指導教諭は、あらゆる活動において自分の考えを発言すること、わからなければ質問すること、他の人のことを考えて行動すること、自分の言葉を大切にすること、を子どもに意識させていた。このような指導を日々積み重ねることで、この学級の子どもは自分から発言したり、行動したりできる主体性が育まれていたと考える。

しかし一方で、授業中に全く発言することができない子どもがいたことにも注目した。学級経営では、発言しない・できない子どもを学級でどのように位置づけるか、どのように扱うかが重要である。主体的に動ける子どもを伸ばすことも必要だが、動けない子を動けるようにする場をつくることも必要である。

そこで、「やまなし」の授業で発言しなかった子どもを通して、再度学級経営について考えた。その結果、自主的に行動するためには、日々の指導により個人の意欲を高めるばかりでなく、それを支える人間関係が必要だということがわかった。いくら動こうとしても他の人から否定されれば、意欲は低くなってしまふ。その人を応援したり、手伝ってくれる人物がいるからこそ、子どもは自ら動こうとするようになるのだと考える。

実習学級では、この学級内の人間関係を集団づくり、集団による活動、認め合いの活動の三段階を経て深めていたと考える。

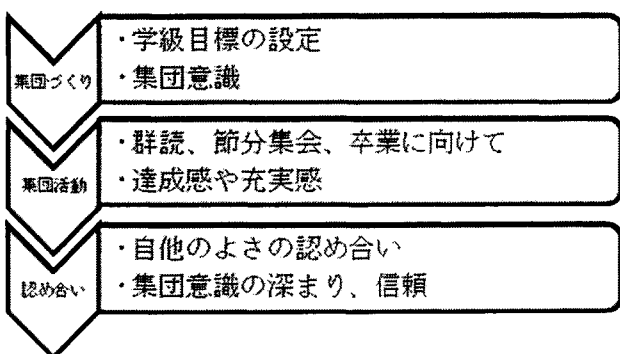


図 学級内の人間関係づくりの構想

特に、総合的な学習の時間では多様なグループ活動を取り入れ、学級全員が動くように、多くの考えが出るようにしていた。

さらに、指導教諭は、子どもたちに自分の行動に責任をもつよう指導していた。努力すれば努力した分、成果が表れる。このことを、たとえば一人学習をしてから全体学習に広げるなど、授業を中心に子どもに実感させていた。社会の厳しさを教室で教えるとともに、その社会に必要な自ら学び、考え、行動する力、「生きる力」を育む支援をしていたと考える。

子どもたちにとって学級は与えられたものであり、自分たちでつくった集団ではない。教室を、授業を聞く場所だと認識しては、いつまでも意欲は高まらない。学級は自分たちのものであり、自分たちの手でつくりかえていくことができるということを子どもたちに理解させ、実行していく必要がある。

一人一人が主体性を発揮するには、教師が知識を教えるだけでなく、子どもに考えさせる授業を行うことが重要である。また、個人の意欲と深く関わる学級内の人間関係をお互いにより影響を与えられる関係にしていくことも必要である。

ただし、事例研究で取り上げた子どものように、自ら意欲をもって活動しようとしなない、あるいはできない子どもが出てきてしまうことも事実である。その子どもたちの主体性をいかにして育んでいくかは難しい所であり、今後の課題である。

4. 今後の課題

研究成果を踏まえて、今後自分が学級担任をする中で主体性を発揮できる学級づくりを実践していきたい。その中でも追究できなかった受動的な子どもをいかに能動的にするかについて、さらに研究を進めていきたい。

主任指導教員 原田 智仁 教授
 指導教員 鈴木 正敏 准教授